

中学校英語科「話すこと(発表)」における 「思考力・判断力・表現力」と「主体的に学習に取り組む 態度」の2観点一体型評価について

学籍番号 209311

氏名 田井花佳

主指導教員 箱崎雄子

1. 研究の背景

2017年に学習指導要領が改訂され、目標及び内容が、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力の3つの柱に整理された。それらを踏まえて、各教科での観点別学習状況の評価の観点については、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理された。中央教育審議会(2019)は学習評価の課題として、評価が児童生徒の学習改善に繋がっていないことや、以前の「関心・意欲・態度」について性格や行動が一時的に表出された場面を捉える評価であるという誤解があること等を述べている。「主体的に学習に取り組む態度」は、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面の2つの側面から評価することが求められており、「思考・判断・表現」との一体的な評価が求められている。そこで、本研究では、中学校英語科「話すこと(発表)」領域において、パフォーマンス課題であるスピーチテストを実施し、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」を適切に評価できるような2観点一体型ルーブリック評価表の作成を目指すとともに、これら2観点の評価方法を考察する。

2. 調査方法

研究協力者は、大阪市内の中学校1年の144名である。1学期にスピーチテスト1、2学期にスピーチテスト2を実施した。パフォーマンス課題であるスピーチテストで、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度(粘り強さの側面)」を一体的に評価するため、2観点一体型ルーブリックを作成した。2観点一体型ルーブリックを作成するにあたって、「思考・判断・表現」のルーブリックの評価観点を生徒とともに簡易的なKJ法を用いて抽出した。「主体的に学習に取り組む態度(自己調整の側面)」については、スピーチテスト1からスピーチテスト2に向けてどのように自己調整を行ったかを自発的学びの3つの過程に則ったワークシートの記述から読み取った。

3. スピーチテストにおける取り組み

生徒とともに、簡易的な KJ 法を用いて、スピーチテストにおける「思考・判断・表現」の評価観点を抽出し、「思考・判断・表現」のルーブリック案 1 を作成した。その後、適宜修正を行い、「内容」「声・話し方」「目線・表情」「姿勢」の 4 観点でのルーブリック案 2 を作成し、それを基に、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度（粘り強さの側面）」の 2 観点一体型ルーブリック 1 を作成した。授業では、「自分の家族を 1 人紹介する」というスピーチテーマを設定し、7 文程度で原稿を書かせた。原稿を書かせる前に、「内容」の評価 A と評価 B の違いを理解させるため例文を示した。その後、姿勢や目線、抑揚のポイントについて、良い例と悪い例を見せ、理解させた上で練習させた。スピーチテスト 1 を実施し、その後、スピーチのふり返し活動を行った。実際に 2 観点一体型ルーブリックで評価を行うと、英語に特化したものになっていなかったことや、評価項目が多く評価がしづらかったこと、ルーブリックの文言の共通理解ができていなかったこと、生徒が英語らしく発音できていないこと等、いくつかの課題が浮かび上がった。これらの課題を踏まえて、スピーチテスト 2 では、「内容」「英語らしさ」「姿勢・目線・声」の 3 観点での 2 観点一体型ルーブリック 2 を作成した。授業では、「外国の学校生活」というスピーチテーマを設定し、約 50 語で原稿を書かせた。原稿を書かせる前に、オープニング、ボディ、クロージングの 3 構成を指導した。練習では、英語らしいイントネーションや、音と音のつながり等を意識させた。また、スピーチテスト 1 に引き続き、「姿勢・目線・声」も意識させ、ルーブリックの文言の共通理解を図った。その後、スピーチテスト 2 を実施し、評価を行った。生徒の自己評価と英語科教員の評価を比べ、それらに違いがでた理由や、評価項目の多さによる評価のしづらさ、内容の評価の仕方等を考慮した上で、2 観点一体型ルーブリックの形を変更し、より簡易的な評価表と、評価の根拠となるものを作成した。「主体的に学習に取り組む態度（自己調整の側面）」に関しては、スピーチのふり返し活動で記述させたワークシートを基に、生徒が自発的学びの 3 つの過程（メタ認知、動機づけ、行動）を行っているかを読み取り、生徒の自己調整を見取ることができた。ただし、今回の実践では、筆者自身の指導と評価の一体化ができておらず、そのことが本研究の課題である。

4. 今後の展望

本研究では、中学校英語科における「話すこと（発表）」領域での、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価についての実践と考察を述べた。今後は、パフォーマンス課題における「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の 2 観点一体型評価を軸に、現場の教員が実際に活用でき、かつこれら 2 観点を適切に評価できる評価方法の確立を目指していきたい。また、その中で、筆者自身の指導と評価の一体化を実現していきたいと考える。